

企画展『化学者展』関連企画

世界化学年記念 化学切手展

— 切手でたどる化学の世界・日本の化学 —

主催：化学切手同好会、国立科学博物館

後援：日本化学会

会場：国立科学博物館 日本館 1階中央ホール
(東京、上野公園)

日時：2011年11月1日(火)～6日(日)

あなたは化学切手をご存知ですか？

元素記号、化学式、化学者、化学実験の器具・装置、
化学工場、化学製品、環境問題、未来社会、などの
化学に関わる全ての切手です。

"Chemistry—Our Life, Our Future"

化学は世界の共通語

開館時間：9:00～17:00(入館は16:30まで)

料 金：常設展示入館料のみでご覧頂けます

(一般・大学生:600円(団体300円)*団体は20名以上
高校生以下および65歳以上 無料)

ホームページ：国立科学博物館 <http://www.kahaku.go.jp/>

お問合せ：ハローダイヤル 03-5777-8600



国立科学博物館で「化学者展」開催中 「化学切手展」「化学遺産認定」紹介も

はじめに

世界化学年の今年、特に秋には、記念行事が集中しているので皆大忙しだ。中でも化学大好き人間必見の行事を紹介する。東京上野公園の国立科学博物館で、「化学者展」を現在開催中である。

11月からは関連展示として、「化学切手展」、日本化学会「化学遺産認定」の紹介もある。最終は12月11日なのでぜひ見逃さないいただきたい。



図1 「化学者展」の様子

企画展「化学者展」

科学博物館の日本の科学者技術者展シリーズを楽しみにされている方も多いと思うが、その第9回の今回は、明治から昭和初期にかけて日本の近代化学の夜明けを担った4人の化学者、桜井錠二(1858-1939)、池田菊苗(1864-1936)、鈴木梅太郎(1874-1943)、真島利行

(1874-1962)を取り上げている(図1)。

幕末の江戸に近代化学の足音を知らせた宇田川榕菴訳の「舎密開宗」、金沢出身の俊英、桜井錠二が18歳でロンドン大学に留学した最初の年に化学の学年末試験で受賞した金メダルなど貴重な資料が大量に展示されている。まさに百聞は一見にしかずである。なお、日本化学会も資料集めなどに全面協力している。

関連展示「化学切手展」

11月1日から6日まで「化学者展」会場の前の日本館1階の中央ロビーで、「化学切手展」を開催する(本号会告参照)。化学切手同好会という極めてオタク的な切手収集家集団が、日頃集めた化学に関するすべての切手、初日カバー、初日スタンプなど、すべて本物を展示する。ついつい重箱の隅に走りがちな思いを抑えつつ、一般の方にも切手収集家にも納得してもらえるように工夫した展示会である。代表的な化学切手15選、副題(切手でたどる化学の世界・日本の



図2 化学式入り(赤円部)の切手

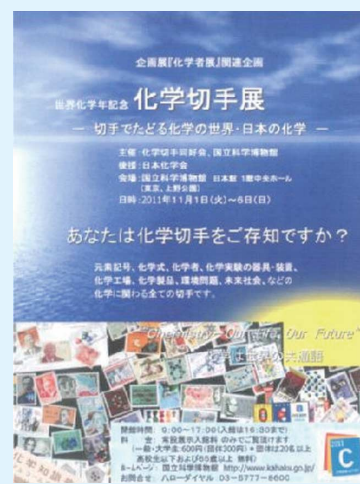


図3 「化学切手展」のポスター

化学)に沿った、化学の歴史、現代の化学と化学産業、環境問題と明るい未来、などのテーマと、世界で初めて化学式が切手に入ったアルコール専売制度10周年記念切手(日本、1948発行、図2)についての蘊蓄、世界で発行された世界化学年記念切手、金属箔切手を精密金属分析したら、などのトピックス紹介がある(図3)。

引き続き11月8日から最終日まで日本化学会「化学遺産認定」紹介として、これまで認定した10件をパネル展示する。ぜひ足を運んでいただきたい。

〔日本化学会理事・化学切手同好会会員
新井和孝(日産化学工業(株))

©2011 The Chemical Society of Japan

世界化学年記念切手のデザインについて

2011年12月10日 化学切手同好会 新井

化学切手同好会では世界化学年を記念しフレーム切手5種を11月末に自主発行いたしました。フレーム内の絵柄はAからEまでの5種類です。デザインについて若干説明します。



1) 世界化学年の統一ロゴマークを使用

統一ロゴマークには使用規程があり、営利目的でないこと、世界化学年の理念に沿っている企画・事業であると認定されていること、とされています。マークには **a**、**b** の2タイプあります。デザインを、より単純にするため **b** タイプを使用しました。



2) 化学切手同好会 (英語名: Chemical Philately Study Group)

全てに記載。出来るだけ英語名称も (JAPAN) 付きで入れた。これがないと他国と誤解も。

3) ロゴマークの色使いを全体に展開

ボトムに青を太巾で、トップに赤を細巾に入れました。

世界化学年

4) 書「世界化学年」

A, B, Cに使用。同好会会員の荒木恒夫氏 (東大理化卒) にお願ひしました。

5) 化学書 宇田川榕庵訳「舍密開宗 (せいみかいそう)」表紙

Aに使用。「舍密開宗」(1837~1847) は日本の近代化学の源流の書。

舍密は化学を意味するオランダ語 *Chemie* の字訳です (*参考)。

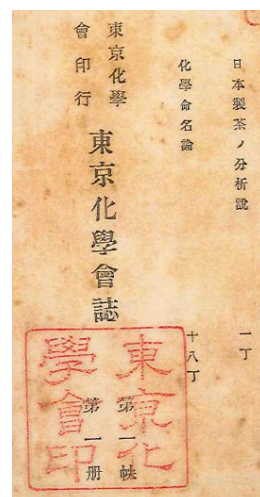


* 原著は英国の化学者ウィリアム・ヘンリーが1799年に出版した *Elements of Experimental Chemistry* を J・B・トロムスドルフが独語に翻訳・増補した *Chemie für Dilettanten* を、さらにオランダの Adolf Ijpeij が蘭訳した『依氏舍密』(1803)である。しかし、単なる翻訳ではなく Ijpeij による『依氏舍密広義』、スモーレンブルグ (F. van Gatz. Smalenburg) の『蘇氏舍密』などの他の多くのオランダ語の化学書から新しい知見の増補や、宇田川榕庵自身が実際に実験した結果からの考察などが追記されている。宇田川榕庵はこれらの出版に際し、日本語のまだ存在しなかった学術用語に新しい造語を作って翻訳した。酸素、水素、窒素、炭素、白金といった元素名や元素、酸化、還元、溶解、分析といった化学用語、細胞、属といった生物学用語は宇田川榕庵の造語である。

6) 「東京化学會誌 (東京化学会誌)」創刊号 (1880) 表紙 (部分)

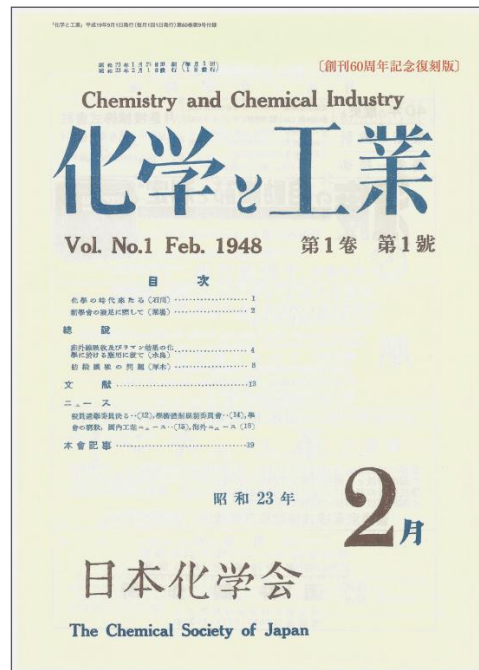
Bに使用。表紙らしくないため廃棄して本体のみで製本所蔵される例が多い。今回は京都大学総合人間学部図書館の許可を得て写させて頂きました (*参考)。

* 現日本化学会の源流である東京化学会は1878年に東大理化の第1回卒業生と在校生24人の集りで発足した。2年後この会誌を発行。「東京化学会誌」は1920年「日本化学會誌」、さらに1948年「日本化学会誌」に継承されたが2002年3月和文報文誌としての役割を終え休刊した。



7) 学会誌 「化学と工業」創刊号(1948)表紙(c)

Cに使用。現在に続く(統一日本化学会)の会誌創刊号。特に巻頭の「化学の時代来たる」(石川一郎初代会長)の記事が、戦後復興を化学の力という時代の意気込みを現在に伝えている。



c

8) 揮毫「凄いぞ化学の底力」(d)より

日本化学会副会長千葉泰久氏(宇部興産相談役、元副社長)の書より、Dの「化学の底力」と、Eの「力」に使用。国立科学博物館と当化学切手同好会が主催した、世界化学年記念化学切手展示会の「明るい未来、化学の力」コーナーのイメージを切手デザインに取り入れたいと、強くお願いして使わせて頂いたものです。

9) アルコール専売制度十周年記念切手シートタイトル(e-1)

Eの「化学」は、アルコール専売制度十周年記念切手e-2(*)のシートタイトル「化学知識普及運動」から化学だけ使用。

*日本の代表的な化学切手(1948年発行)である。切手デザインに化学式 C_2H_5OH が堂々と登場している。世界で初めて化学式が登場した切手である。当同好会としても誇りの一枚である。最初、切手中央の工場図をそのまま使用しようと試みたが不可であった。次にシートタイトル「化学知識普及運動」が世界化学年の趣旨に通じることもあり使用を打診し、許可された。しかし試作では多数使用したが、字数が多いことや、現代ではやや直截的に過ぎることから、最終的に「化学」のみを顕彰として使わせて頂くことに落ち着いた。



e-1



e-2



d

10) 日本化学会のロゴマークの使用

C、Dに使用。ロゴマークfのCSJってなあに、という方も Chemical Society of Japan の略、ベンゼン環仲間の会、と聞けば納得して頂けるのではないのでしょうか。



f

なお、試作段階は全てはがき用額面50円切手、フレームのデザインは穏やかな「グリーン」で進めていましたが、同好会での最終議論で封書用額面80円切手での発行となり、それに伴って穏やかな「ブルー」の10連フレーム切手シートとなりました。

これらの切手ができるだけ多くの方に使われ市中に流れることで「(日本の)化学」がより身近なものになることを願っております。

以上文責 切手デザイン担当 新井和孝

Outline description of a design of the commemorative Stamps and the commemorative Postmark

Kazutaka Arai and Koji Abe
Chemical Philately Study Group (JAPAN)
Dec 1st, 2011

We, Chemical Philately Study Group*, issued five original IYC 2011- memorial stamps December the 1st in Japan, and the same time First Day Covers are prepared in Mito-Senba Post office in Japan, with the commemorative Postmark. * Coordinator is Mr. Masami Saitoh.

Five Original Stamps (All images) each 3.2cm x 3.8cm, designed by Mr. K. Arai.



The Commemorative Postmark $\phi = 3.2\text{cm}$, originally designed by Mr. K. Abe.



Outline description of a design of the commemorative Stamps

1. 世界、化学、年 means international, chemistry, and year, respectively.
2. 切手、力、底力 means stamps, capability, and potentiality, respectively.
3. A, B, C are designed with three epoch-making publications in Japanese Chemical History.
4. D, E are designed to image the power of chemistry, past, present, and the future.
5. Calligraphers of 化学の底力 and 世界化学年 are Mr. Yasuhisa Chiba, one of vice-presidents of CSJ and our member Mr. Tsuneo Araki, respectively.

Outline description of a design of the commemorative Postmark

1. 切手展 means an exhibition of stamps.
2. 水戸千波 is pronounced Mito-Senba, a name of post office held the exhibition.
3. Dr. Sumio Iijima, belonged to NEC Tsukuba Research Laboratories, found Carbon nanotubes (CNT) in 1991 in Japan. Once he was a candidate of Nobel Prize with the CNT, along with the fullerene and graphene.
4. The 23rd year of Heisei, the era of Japan, is the same year in 2011 AD.

化学切手展示会

国立科学博物館



天井のステンドグラス



水戸千波郵便局



会場の中央ロビー(「化学者展」隣接)